

〈研究ノート〉

## パチョーリ『簿記書』の周辺によせて

——わが国におけるパチョーリ研究の歴史——

茂木 虎雄

近時、わが国のいくつかの大学において、パチョーリの『スンマ』(Luca Pacioli, Summa de Arithmetica, Geometria, Propotioni et Proportionalita, 1494) 原典を購入した。1494年の初版、1523年の第2版をとともにそろえて購入している。戦前の大正末期、昭和初期においては平井泰太郎博士(神戸大学)が初版、第2版を個人で所蔵されていたと聞くが、戦後の昭和48年に第2版を小島男佐夫教授(関西学院大学)と関学大が購入したとのこと。昭和49年には日本大学が初版を、さらに西川孝治郎博士(三菱石油をへて日本大学)が第2版を昭和48年に購入されたと聞く。そして昭和62年には日本大学が第2版を、さらに神奈川大学、慶応大学、早稲田大学がともに初版、2版を、さらに大阪学院大学もまた大阪商業大学も購入されたと聞く。まことにわが国はパチョーリ大国となった。

なぜパチョーリはこれ程までにもてはやされるのであろうか、これが会計史[会計史研究]における地位は何か、そして今後の会計史学の方角は……と、パチョーリ原典に接して多くを考えさせられる。日本におけるパチョーリ研究をふりかえるなかで、パチョーリとパチョーリ研究の現代的意義を考えてみたい。パチョーリの名は古く、洋式簿記の導入、[西欧の]複式簿記書の流入とともに聞えてくる。そこで明治初期からの書物にみえるパチョーリ研究から吟味して現状にいたる過程を考察したい。

### (一) 明治初期におけるパチョーリ研究

曾田愛三郎氏の『学課起源略説』(明治11年=1878年)において[本文は縦書きであるが]「デラポルテ氏曰ク 1495年ノ頃伊太利人ブルサー・ルーキ氏ガ国語ヲ以テ記簿法ヲ著述セシハ記簿ノ理義ニ就テ註釋ヲ下セシ歐洲最初ノ記者ナリト……」<sup>1)</sup>とのべているが、ブルサー・ルーキはルカ・パチョーリのことである。ここに1495年とあるが、1494年出版というのが通説であり、正しい。また記簿あるいは記簿法という用語は book-keeping の邦訳であろうが、簿記ではない。どのようなプロセスをへて「簿記」になったかは日本簿記学史の問題であるが、明治6年[1873年]の福沢諭吉の訳では『帖合之法』であった。

明治19年[1886年]に海野力太郎は『簿記学起源考』を著す。「いわゆる簿記学なるものは何の時に起り何の人に成るを詳にせず寧ろ流を汲で其源を忘るるものにあらずや」といい、簿記を論ずる場合に「貸借の理を説き例題の式を解するに止まり」という。簿記学は計算技術解説論が一般的だとしているが、本質を歴史のうえから究めようとしている。わが国最初の会計史=簿記史研究であるが、洋式簿記(海野氏は「西人簿記」といっている)が導入されて間もなくであり、洋式簿記

1) この引用は後に改めてふれる西川孝治郎博士の『複製・パチョーリ簿記論』(1959年、森山書店)の附録に複写されたものである。

としての複式簿記が一般的な簿記実践となっているとはいいがたい時期によくこれを書いたと思う。日本人学者がこのんで用いる英語の会計史書である R. Brown の会計史(R. Brown [eds.], A History of Accounting and Accountants)も1905年(明治38年)の出版であるようななかで、よくも書きあげたものと思う。原文はカタカナである。

中世イタリアにおいて複式簿記法(簿記学)が起つたと海野氏はいふ、すなわち「簿記学ノ起ル遠ク上世ニ在リト雖モ而カモ其伊太利ニ入テ初テ具備セルコトハ蓋シ疑ヲ容レザル所ナリ」<sup>2)</sup> という。本来は縦書きであるが、横書きで引用。「アンデルソン氏ノ貿易起源誌」よりの引用として、「簿記ノ学其源ヲ伊太利ノ市中ニ発シタルコト疑フベカラズト雖モ若シ然ラズトセハ尚ホ此国ニ入りテ初テ其衰運ヲ挽回シタル者ニシテ即チ当時各種ノ代数学ヲ教授セシベニス府中ニ流行セシコト尤モ信スルニ足レリ而シテ所謂複式即チ商売記簿(メルチャント・アツカオンツ)ナル者ハ其源ヲ代数学ノ定則ニ採リタルモノニシテ其始テ代数学ヲ出版セシハ則チ夫ノ『セント・フランシス』位ノ僧リウカス・ジー・バルゴ一ナリト」(海野・3ページ)という。引用であるかどうかは別として、とにかくパチョーリが注目されている。わが国の最も古いパチョーリ研究である。以上の引用に続いていふ。「古来世の学者は概子皆リウカス・ジー・バルゴ一(或ハリウカス・バシヲラストモ云フ)ヲ以テ我ガ簿記学著述者ノ鼻祖ト為セリ蓋シ氏は1400年代ニ在テ尤モ有名ナル数学者ニシテ夫ノ亜拉比語ノ代数学ヲ翻訳セハ則チマタ此人ナリト云フ氏ハ本ト『セント・フランシス』位ノ僧官ニシテ伊太利国ノフローレンチン領ベルビー公ノ采地バルゴ一・エス・セープチロト云ヘル都邑ニ在リシヲ以テ世人ハ或ハ氏ヲ呼ブニ即チ此邑名ヲ冠セリ而シテ氏ガ簿記学ノ著述ハ実ニ1495年(・は茂木)ヲ以テ初テ世ニ出デタリ」と。

ここにルカ・パチョーリの名が登場する。海野氏の著述は翻訳的論述ではあるが、パチョーリの業績を正当に評価している。パチョーリの本文の本格的紹介はまだ若干の日時を必要とするが、海野氏の引用原典のいくつかは、デ・ラ・ポルトによっているが、これは1685年の本であった。この書を海野氏はすでにみている。洋の東西を問わずパチョーリこそは簿記学の始祖といっているのであった。海野氏は「よくぞ、まあ」、この本に注目したことを。いよいよパチョーリ研究が始まる。

明治10年代、洋式簿記として、複式簿記法が書物を通じて日本に紹介、導入されてまだ日も浅い。複式簿記法が一般化しているとはいいがたい。むしろ、会計に対する認識が薄いなかで、このような著述をなしたが、早咲きという感がしないではない。まだ受け入れ体勢がととのった状況ではなかった。しかし、パチョーリの名と複式簿記書が紹介されてきた。パチョーリ研究前史でもある。

## (二) 大正期におけるパチョーリの翻訳と研究

大正9(1920)年に平井泰太郎氏(後の神戸大学名誉教授)、当時、東京高等商業学校専攻科学生時代の訳業「『ばちおり簿記書』研究」(『会計学論叢』第四集 神戸会計学会)が、公刊されるが、氏が学んだ神戸高等商業学校では東夷五郎教授の『新案詳解商業簿記』とか、『商業会計』の書において歴史研究がなされていた。平井氏は、すでに神戸高商の卒業論文でもパチョーリを扱っている。東教授の著述には充分眼を通されて、歴史研究を志ざされたと思う。この伝統が神戸学派にはある。なお、東教授の『新案詳解 商業簿記』の初版は、なんと古く、明治36(1903)年に出版されている。このなかに「簿記の起源及

2) 海野力太郎『簿記学起源考』(明治19年)3ページ。西川孝治郎博士より同書の複写をいただいた。

沿革」がのべられている。このようななかで、平井教授はパチョーリ簿記書の翻訳を志す。これがわが国最初の翻訳であるし、原典にそくした本格的な研究となった。

パチョーリ簿記書の平井訳。それは邦訳が中心となるのであるが、まず「解題」があり、「凡例」、「原著書目次（摘要）」となり、「ぱちおり簿記書」（これが翻訳）よりなる。

平井教授はいう。「余がパチオリ全訳は主として Geijsbeek 氏英訳書を辿りて翻訳したり。引証の用に供せらるべき資料書なるを以て、文意を害せざる限り逐次訳を試みたり」（凡例二）と。訳書全体は大正年間のことで当然に縦書きである。平井訳はわが国最初のパチョーリ簿記書の全訳の名誉をもつもので、ここに研究が本格化してくる。これは平井氏の神戸高商の卒業論文が基礎にあると聞くなり。よくもまあ学生の身で、しかもこれまた稀覯本の Geijsbeek の会計史書をみだして翻訳したものである。

本論に入る前にゲースビークの『初期の複式簿記書』についてふれる。これは、J. B. Geijsbeek, *Ancient Double-Entry Bookkeeping ; Lucas Pacioli's Treatise (A.D.1494—the earliest known writer on bookkeeping) reproduced and translated with reproductions, notes, and abstracts from Manzoni, Pietra, Mainardi, Ympyn, Stevin and Dafforne, Denver, Colorado, 1914*である。この本の前半に、丁度半分ほどがパチョーリ簿記書を扱うが、見開きの左頁にパチョーリ原文の複写がのり、右頁が英訳である。平井氏はこの英訳をもとに邦訳をしたのであった。平井氏はもちろん原文をみているのである。この原文によって全世界の人々はパチョーリ簿記書に直接に対面することができた。これに接して会計史研究者のなかでイタリア語の習得を志したのも多かった。

ゲイスビークの本書はパチョーリの名を高く唱いあげているが、さらに標題にあるよ

うに6人の簿記書著者の名をあげているが、これは単に「15世紀会計史」のみならず、「17世紀会計史」への研究の扉を開く。とくにステビン簿記論の紹介は注目される。20世紀の初頭に、よくもこのような本が出たと感心するが、これとてたやすく手に入るものではなかったろう。西川孝治郎教授(日本大学)は「私はこの本を昭和10[1935]年頃、銀座松坂屋の古書展で手に入れて愛蔵している」<sup>2)</sup>といわれ、「当時金30円であったが、今(1968[昭和43]年——茂木注)はかなり貴重な本になった」という。

「解題」では、パチョーリ簿記書の忠実な全訳であることを紹介されるが、パチョーリ簿記書の会計史的意義を説く。

「近世簿記法（伊太利式簿記を指称す、と平井氏は注記する——茂木）の創始は、15世紀末葉、ルーカス・パチオリの『ズムマ』の編述にあり。彼の書一度出でて、伊太利式簿記の系統的組成始めて全く、此人一度出でて、近世企業は其最も完全なる発達に適應したる記帳技術の方法を得たりと云ふを得べきもの

1) 太田哲三『会計学の40年——我が半生の記——』（中央経済社・昭和31[1956]年）31ページ以下参照。この書は太田教授の自叙伝であるが、そのなかで「会計学会の設立」という編があつて「神戸会計学会」という項がある。「平井君は神戸高商を大正7年に卒業してから、東京高等商業の専攻部へ来て、上田先生の研究室に入った。神戸在学中は東先生の研究室で当初から会計学を専攻された専門学徒である」（32ページ）とされて、神戸の卒業論文としてゲイスビークのパチョーリ簿記の全訳と紹介している。「ゲイスビークはその簿記の部分を英訳したのであるが、その訳本でさえそうざらにある本ではない。平井君はそれから重訳したのであった。けれども年少の一学生の身でそれを完訳した努力については、当時すべてが驚嘆し、また敬服していたのである」と高い評価を与えられる。

2) 西川孝治郎「パチョーリ簿記論について」『商学集誌』（日本大学）第38巻第1号（1968年7月）5ページ。なおこの論文について改めてふれる。

なり」<sup>3)</sup>。これは平井氏のパチョーリ簿記書研究の冒頭の文章で、パチョーリ簿記書の会計史的意義を適確にのべている。

ズンマによって、いわゆるイタリア式簿記法（複式簿記法）がはじめて体系的にのべられたとするし、これは「近世企業」に適応した記帳技術の方法がえられたというのであった。ここで平井氏は「此書以前世に収支計算の方法存せずとの意に非ず」といわれる。複式簿記は単なる財貨の増減計算の技法ではないという主張がこめられているし、さりとてまた「余は彼を以て複式簿記の発明者、若しくは着想者なりと云ふに非ず」とされる。そこでパチョーリの評価となるが「パチオリの功は、創意に非ず、編述にあり。発明に非ずして紹介にあり」<sup>4)</sup>とされる。パチオリの功績を正確につかまえているし、会計史学のあり方を示している。

平井氏の主張で、またとくに注目されるのは「蓋し其主眼とする所は、初学者に教示するに非ずして、実務家に正式方法を伝へんとしたるにあればなり」という点である。これは今日、パチョーリ簿記書の評価に大きな意味をもつ。平井氏は70年も昔に実にするどい意見をのべたと感心する。ズンマ全体を見ると「彼（パチョーリ）は其書の算術及幾何の部分に於ては多くの図解をなすに拘らず、『計算及記録』（これが簿記論部分である——茂木）の部分に於ては、日記帳、仕訳帳、及元帳其他に何等の図式をも与ふる事なし」といっている。数学部門では図示による説明が多かったが、簿記論にはこれがない。この点は文章だけなので翻訳には便利ではあろうが。単なる入門書ではなく、実務の手引きであり、簿記に通じている実務家に本当の複式簿記を伝えようとしたものであろう。そこでまた簿記学がここにはあるかどうか問題となる。

パチョーリには「記帳例題」の説明、解説は殆んどない。この点 Geijsbeek の書物に

とりあげられたほかの人達はこれらを重んじている。とくに Stevin においては貸借対照表の雛型がのべられ、簿記の取引の仕訳から決算集計までが例題でのべられている。パチョーリ簿記書に例解のないいわれが平井氏によって知られた。

最後にパチョーリ簿記書に対する平井博士の思い入れをみよう。「此書一読の後、何人と雖ども、現今の簿記パチオリ以上に何等創意なし、との歎を發せざるを得ざるべきことなり」といふ、「終にパチオリ以後世に未だ簿記学者非ざるかとの感を抱かしむることしきりなり。噫、汝簿記法終にこれを以て止むか」とされる。パチョーリ以後500年、複式簿記法の進歩はないものか。前期的資本の複式簿記法は近代的資本の簿記となったときどうなるか。

「パチオリの書一出度でて425年、余は此全訳を先づ本邦学界に捧ぐるを得たることを感謝す」とわが国最初の邦訳であることを示し、「恩師を損ふこと無くんば幸なり」と謙遜されて、1919年6月という日付をつける。今（1991年）から72年の昔であって、会計学もようやく体系化されようとした初期に、よくもこの全訳をなされた大きな敬意を表する。なお、訳了は1918年5月50日であった。

『ばちおり簿記書』といわれるものは『ズンマ』のうちの第9篇にある Particularis de Computis et Scripturis（計算及記録要論）である。これは36章よりなる（ただし第36章については三つの独立の見出しがついている）。

第1章のタイトルを平井氏は「良商人に必要な事項。ヴェニス（Venice）其他に於ける仕訳帳附元帳記録の方法」と訳す。平井氏は「原著書目次（摘要）」では「第一章 緒論」と示されたところである。良い商人にとって必要なものの一つとして「総ての取引を秩序

3) 平井泰太郎『ばちおり簿記書』研究』（『会計学論叢』第4集大正9年）77ページ

4) 平井泰太郎 前掲書 77ページの注2参照

整然たる方式の下に排列して、之を一目瞭然たらしむべき方法、即ち、借方貸方に依る方法これなり」<sup>5)</sup> という。これが複式簿記であるが、複式簿記という言葉はまだ確立しておられない。平井氏は「借方貸方に依る方法これなり」というところに傍点を打って強調している。原語は *notitia : Quanto alor delito e anche creolito* であって、英訳では *the debit and credit method* と示してあるところである。

「著者（パチャョーリ）は、以下ヴェニスに於て用ひらるゝ方法を其儘に解説すべし」といっている。これがヴェニスの方法そのものかどうかは検討を要する。

第5章は、摘要では「排列」(Disposition = Arrangement) とされるところであるが、平井氏は「排列と名づくる本論篇第二部主要簿——其意義——営業の内容及び商人の三主要簿」と記している。日記帳 (Memoriale)、仕訳帳 (Giornale) そして元帳 (Quaderno) からなる。これが当時の基本的帳簿体系であった。

ここに複式簿記の方法が説かれるが、全体で36章あるといわれるが、第36章は「元帳記入の規則及方法の概要」と要約される。「総ての貸主は元帳の右側に現れ、総ての借主は左側に現るべし」(183ページ)、から始まるが、文中の見出しとして「商人の帳簿に記入すべき事項」「商人の記録帳 [Recordanze] に記録すべき事項」、そして最後に「元帳借方及貸方記入の実例」となっている。「如何にして元帳借方記入 [また貸方記入] をなすべきか」というものである。ここを第37章とする見解も後に出てきた。この点については節を改めてのべる。

大正9年、これは東京高商が東京商科大学（一橋大学）へと昇格した年であり、第一次世界大戦後の日本の経済的実力向上が背景にあって、会計学研究も充実してくるなかで、平井氏の研究が出た。学生時代にパチャョーリ

簿記書を、わが国最初のほん訳として行った。これぞまさに不滅の、不朽の業績である。訳出はまことに正確で、高度の会計学の研究水準を知る。この仕事の基本にあって、外国留学の折にパチャョーリの原典を発掘、取得されることとなる。発掘された眼力に敬意を表する。平井氏はまさにパチャョーリ研究の先駆的開拓者であった。困難も多かったであろう。これが後に太田哲三教授（一橋大学）によっても高く評価されている。なお、平井教授の訳著は中国語訳パチャョーリ簿記書の台本となったという。

### (三) 昭和初期の簿記研究とパチャョーリ

昭和8〔1933〕年、これはわが国簿記学史上の画期的時点である。黒沢 清「複式簿記の発生史的考察」(『会計』第33巻第3号〔昭和8年9月]) が発表される。木村和二郎「複式簿記と企業簿記」(『会計』第32巻第1号および2号〔昭和8年1月および2月]) の発表があり、太田哲三教授、木村重義教授の論文も出て本質論研究が大いに前進する。雑誌『会計』を通じて、黒沢 清教授と木村和二郎教授は、お互を意識し、秘められた論争が展開される。これが黒沢 清『簿記原理』(昭和9〔1934〕年)となり、木村和二郎『銀行簿記論』(昭和10年・有斐閣)に結実する。これらは今日もその学問的意義を失わない。

人名勘定、物財勘定、そして名目勘定の重疊的体系として複式簿記の計算構造を規定する「発生史的考察」を展開する黒沢清教授の方法に、新しい簿記史論の原型をみる。このような背景をもって黒沢 清「パチャョーリ複式簿記積義」(『会計』第38巻第2号〔昭和11年2月]) が発表されてくる。

昭和10年代になった。黒沢 清教授の翻訳が出る。教授は E.L. Jäger による1876年のドイツ語訳が近代語によるパチャョーリの翻訳

5) 平井泰太郎 前掲書 90ページ

のはしりとなったという。これは「ルカ・パチョーリ『複式簿記釈義』(『会計』第38巻第3号〔昭和11(1936)年2月])である。

「はしがき」においてはイエーゲル以降の翻訳の歴史をたどる。「イエーゲルの訳書は、多少の誤訳の存することが、後に英国の簿記史家マーレイ(D. Murray)及びドイツの簿記史家ペンドルフ(B. Penndorf)等によって指摘せられたとは云へ、最初の翻訳としての労苦と共にパチョーリへの注意を喚起したこと、刻苦的な解説を加へたこと且後の研究者への手引を与へたこと等の諸点に於て十分に評価せらるべき価値を有するものである。殊に後に現はれた訳書の大部分は、原書からでなく、イエーゲルからの重訳だったことも註意してよい点である」(『会計』33巻74ページ)。

イエーゲルのドイツ語訳こそは、最初の翻訳で、これ以前のパチョーリ簿記書の祖述書とはおもむきを異にする。近代語への翻訳であるが、黒沢教授は「後に現はれた訳書の大部分は、原書からでなく、イエーゲルからの重訳だった」(『会計』, 74ページ)と注目すべき発言をされる。平井教授が訳出を試みたゲースビークも「イエーゲル訳書を手引として原書の英訳が公けにされた」(同上, 75ページ)といっている。イエーゲルのドイツ語訳書のパチョーリ研究への重要度を示唆されている。黒沢教授はさらにK. P. カイル(Kheil)のチェコ語(ボヘミア語訳)にふれ、イエーゲル訳によらず直接原典から訳出であると紹介する。黒沢教授によるパチョーリ翻訳の研究史は教えられるところが大きい。

ついで、黒沢教授は簿記論の目次を丁寧に訳出する。目次36章を記し、「クリベリ英訳を参照しつつペンドルフ独訳を基準とせる拙〔黒沢〕訳」といわれて、第1章、第2章を翻訳する。ここにペンドルフ訳が登場する。すなわち, Balduin Penndorf, Luca Pacioli; Abhandlung über die Buchhaltung 1494,

Stuttgart, 1933である。

昭和11年, まだ, このような研究ができたのであるが, やがて戦争期に突入してゆく。

#### (四) 昭和20年代後期の会計学研究—— 会計史研究の新展開——

世界史の一大転機でもある第二次世界大戦が終って, 学問の自由が戻ってきた。自由化のなかで, 会計学の分野で歴史研究が活発化する。これにはマルクス主義の急速な展開も大きく影響している。「企業会計原則」の制定も大きな意味をもつが, 動態観思考の急速な確立がのぞまれる。このようななかで, 歴史的研究を下敷きとして, 山下勝治『損益計算論——損益計算制度の発展——』(泉文堂版)が昭和25(1950)年10月に公刊される。これは「口別損益計算制度」, 「総括的損益計算制度」, そして「総括的損益計算制度の口別計算化」という三段階規定による会計史の体系化を指向するもので, 戦後会計史学の発展の一つの大きな証明となる。とくに簿記史ではなく, 会計史としての展開は注目される。

昭和27年には片野一郎訳『リトルトン会計発達史』(同文館・昭和27年5月)が出版される。これは会計史における15世紀と19世紀の重視説といえるが, 有名な一文——片野教授の名訳にもよるが——, 「光ははじめ15世紀に, 次いで19世紀に射したのである。15世紀の商業と貿易の急速な発達にせまられて, 人は帳簿記入を複式簿記に発展せしめた。時うつって19世紀にいたるや当時の商業と工業の飛躍的な前進にせまられて, 人は複式簿記を会計に発展せしめた」(片野訳・498ページ)がのっている。

本書は二つの篇よりなるが, 前篇は「複式簿記の生成と発展」であり, 後篇は「簿記より会計学への発展」である。この前篇にパチョーリ簿記論にいたる歴史がのべられている。片野一郎訳であるが, ここに片野会計史学が展開されている。これまた歴史研究に極めて

大きな功献をする。

a. 江村 稔『複式簿記生成発達史論』  
(昭和28〔1953〕年12月・中央経済社)の附録

複式簿記史として本邦初の著書であるが、江村教授の東京大学助手時代の研究を見事にまとめたものであり、その附録に(一)『「計算および記録に関する諸説」の著者についての考察——ルカ・パチョーロ研究』と(二)に「ルカ・パチョーロ簿記論附録記帳範例について——15世紀の振替記帳」に、戦後のパチョーリ研究の再出発をみる。この(二)については稿を改めて詳論したいが、江村教授の本書は複式簿記史の科学的体系化が見事に開花した極めて大きな業績と高く評価する。

江村教授の(一)についてみてゆくと、教授の問題の提起の根幹は、「ルカ・パチョーロこそ最初に簿記を理論的に把握・叙述したものであり、後世の実務にも甚大な影響を与えた簿記学の父であるとなし、彼以後の著作の多くはルカ・パチョーロの秘かな、しかも拙劣な模倣であると言え云われるに至っている」(江村・331ページ)現状のなかで、歴史的に当のイタリアでさえ無視されてきたところから英雄へとあがめられるような飛躍をどう理解するかということであった。そして、今日ではパチョーリばかりがなぜもてろ／＼となっている。

江村氏の問題提起の第二は、前者の問題にからまるが、パチョーリの地位の再吟味のなかで、ゆらいできていることである。すなわち、「簿記史・会計史の研究が進むにつれ、しかも、その研究が簿記自体の発展としてではなく、資本主義の進歩・商業資本の確立の如き社会的・経済的条件との照応の中で問題とされ、簿記史の研究に経済史・社会史・文化史的観点が強く反映されるにつれて、ルカ・パチョーロの地位は再びゆらぐに至った」

(江村・331ページ)といている点。これは剽窃論にもつながるが、教授の主張はパチョーロ簿記論でのべられた簿記のみが完成された形態ではないという主張にも関連してくる。江村氏は代理人簿記説を展開し、古代ローマ起源説の展開が基底にあったが、江村氏は資本主義発達史とのかわりを問題としている点、戦後の会計史研究のあり方に一つの方向を示している。

江村教授は Fabio Besta の La Ragioneria を読み込む。この会計学書の第三巻が複式簿記史に関係する部分で、黒沢 清教授より借り出されたという。これによって、さらに問題を展開するが、ベストのパチョーリについての疑問を紹介する。このベストの『会計学』は稀覯本である。「ベストの結論を要すに、『簿記論』に説くところ36章は彼自身の手に成ったものではなく、何人かの述べたところを改訂し、必要な部分を補足したものにすぎないと云うにある」(347ページ)との説の紹介。「第2にベストは、パチョーロはズマの他の部分——特に学術的部分では——その出典を明らかにし、著者の名を挙げているにもかかわらず、『簿記論』に関する限り、これが全く見られぬことをあげている」という(350ページ)。江村教授はさらに「第3の問題は『簿記論』における用語の問題である」(350ページ)という。「ベストによれば、パチョーロがここに使用している言葉は、ヴェネチアの商人の間で用いられた日用語であって、いわば一種の方言であると云われる」という。これははたして欠点であるかどうか。以上、これらの問題はあっても、ベニスの商人の簿記実践から簿記論を集大成したパチョーリの功績は大きい。

江村教授は「ルカ・パチョーロの『ズマ』およびその中に収められている『簿記論』が果して彼の手になるものか否かは、多くの人々によって種々の角度から討究されて来た問題であった」(354ページ)とする。しかし江村

教授は15世紀頃の北イタリアにおいて、パチョーリがのべたような簿記実務がなされたことに注目する。すなわち「パチョーロが15世紀末にヴェネチアで『簿記論』をあらわす以前において、イタリア各都市では複式簿記がすでに一応の完成に達していた」(355ページ)という。しかし定期的な決算の観念はなく、口別商業〔当座制企業〕の損益計算であったという。このような簿記法についての叙述をなしたパチョーリについて、江村教授は「ルネサンスにおける多くの学者がそうであったように、学問の作家ではなく、知識の集大成を行う『編集者』であった」(360ページ)という。編集者なるが故に、尊いのであった。簿記は一人の天才によって発明されたものでなく、14・5世紀の経済状況が生み出したものである。

江村教授の引用・参考文献は豊富であって、とくに資本主義との関連を意識したが、これによって、パチョーリ研究も会計史研究も科学化したのであって、戦後の本格的研究の先駆となった。

### (五) 昭和30～40年代のパチョーリ研究——本格的展開——

戦〔争直〕後の経済的疲弊、生活難のなかで研究は再開された。前節の時代に並行して片岡義雄教授の研究は展開する。これが『ウルフ古代会計史』（邦光堂・昭22）の翻訳となる。この訳業とともにパチョーリ原典の邦訳が進む。本格的な翻訳時代となる。

#### b. 片岡義雄『パチョーリ「簿記論」の研究』（森山書店・昭和31年）

片岡教授は翻訳という仕事によって、パチョーリに迫ってゆくが、昭和24〔1949〕年早々から『経済集志』（日本大学）。『経済志林』（法政大学）。『会計』にこつこつと翻訳を發表する。教授はGeijsbeekのパチョーリ英訳

（前出）、Penndorfのパチョーリ独訳（前出）、そしてPietro Crivelli, *An Original Translation of the Treatise on Double-Entry Bookkeeping by Frater Lucas Pacioli*, London, 1924を底本として、三著を比較しながら翻訳を進める。ゲイスピークにはパチョーリ原典の複製がのっているが、この時はまだ片岡教授はパチョーリ原典そのものを見ておられない。ゲイスピークの複製をみられつつ、三著のなかから最も原典の意を体しているところを表現される。片岡教授はゲイスピークは「専らイエーゲルの独訳書のみを台本としたものであって、中世イタリア語を十分英語に表現していない欠点がある」（『研究』40ページ）といわれるが、ペンドルフについて、「従来公けにされたパチョーリ『簿記論』の訳書としては、もっとも正確かつ権威あるものであるということができよう」（『研究』41ページ）と高い評価を下すし、クリヴィリの英訳書は「パチョーリの『簿記論』の原典から英訳したものであって、概して適切な訳文であるとして称讃されているのである」（同上40ページ）という。ここに三著を忠実に追った訳出、それを「注解」をつけて、訳書の原文を示し、評価を加えて、訳の本文をつくりあげる。ここに学者の良心をみるものである。以後、パチョーリ簿記書邦訳本の古典（定本）となっている。

戦争、そして敗戦の混乱期で、これら三著も自由に使用できなかったであろう。「パチョーリ『簿記論』の内容をなす通計36章のうち、第1章から第10章にいたる10章および第18章のヴェニスにおける取引所との会計については十分な註解を施すことができなかった。また最後の第35章および第36章の2章については、止むを得ない事情のためにペンドルフの独訳書を十分に参照することができなかった」（『研究』あとがき286ページ）といわれる。何か困難な時代の研究という感が深い。

「さらにパチョーリの『簿記論』の最後に



ある附録の例解および、パチョーリが『簿記論』を執筆したときに流通した主な貨幣の一覧表を省略せざるをえなかったことは、返す返すも遺憾である」(同上286ページ)といわれる。「附録の例解」については改めてふれたい。教授は訳出しなかった。

平井教授に続いて、全文邦訳の第二書となった。時間をかけての翻訳で、パチョーリ簿記書の真髄を表現している。ここに容易に「パチョーリ簿記書」にふれることができるようになった。

江村 稔教授の御助力に謝していることが「序言」にあるが、江村教授から昭和24年春に片岡教授の翻訳について、パチョーリの原文を読んでいるが、この文章は句読点がないので苦勞していると聞いた。これはゲイスビークの書のパチョーリ原典であろうか。このとき、片岡教授は平井教授所蔵本は参照できなかったようである。

片岡教授の『研究』は二つの篇よりなりたつ。第一部は「ルカ・パチョーリの生涯」で、そのなかの「パチョーリ『簿記論』の祖述者」は圧巻である。グローバルなパチョーリ研究史である。

パチョーリ簿記書は、それに先立つコトルリイの著述があつて1458年に草稿は完成したものと片岡教授は言われているが1573年に公刊されたという(20ページ参照)。公刊はパチョーリが最初であるが、その後はイタリアのタリエンテが祖述という形で1525年に簿記書を出す。

その祖述はまずイタリアから始まるが、1543年にはイギリスでヒュー・オールドキャッスル(Hugh Oldcastle)が、オランダではヤン・インピン・クリストッフエル(Jan Ympyn Christoffels)夫妻が、さらにフランス語でも翻訳・紹介している(26ページ参照)。片岡教授は祖述の歴史を追うが、最後に「近世諸国におけるパチョーリ『簿記書』の翻訳者」にふれる。いよいよ19世紀末葉の

本格的な翻訳史に入る。

その第一は、イエーガー(Ernst Jäger)のLucas Pacioli und Simon Stevinという書名の翻訳と研究であった。これがゲイスビーク訳の台本となる。そしてこれがさらに平井訳になってくる。

片岡教授はギッチの伊太利語訳、ワルデンベルグのロシア語訳、カイルのボヘミア語訳、ヴォルマー・リンベルグのオランダ語訳、ゲイスビーク訳、クリブリ訳、ペンドルフ訳、ラウリッヒ(Hugo Raulich)のチェコ語訳、そして邦訳へと歴史的にふれてそれぞれの特長を簡潔にのべている。ここに古典的なパチョーリ研究史を知る。

このような研究をなしつつ、翻訳を進めるが、これらのまとめとしてパチョーリ簿記書の特長を五点にまとめている。これを引用しよう(序言 2ページ)。

- (1) 簿記の帳簿は三種であつて、日記帳・仕訳帳および元帳がこれである。
- (2) 仕訳帳は、単に日記帳に記入した取引を、借方および貸方に仕訳するばかりでなく、価額を換算・統一する任務をもっていた。
- (3) 損益勘定は、現今のように営業年度ごとに作成するのではなく、各冒険商売の終了するごとに、これを作成した。
- (4) したがつて、商品売買勘定を欠き、また商品棚卸のことを欠いていた。
- (5) 元帳の締切および試算の方法が特殊であつた。

このように片岡教授はパチョーリ簿記論を特色づけている。当時は期間損益計算が未だ行われておらず、口別損益計算の段階であることを知るが、これが3, 4, 5の説明となっている。

ここに第二の邦訳が完成した。平井教授、片岡教授がパチョーリを身近かなものとした。片岡教授は原典こそみておられないものの、前述の三著を比較しながら、パチョーリの精

神を忠実に邦語にあらわす努力をされる。以後、日本語の決定訳とまでいわれるようになる。

昭和32年(1957年)の日本会計研究学会上野・太田賞の荣誉に輝く。片岡教授は未完成と謙遜しておられるが、パチャォーリ一筋の姿勢に崇高なるものを感ずる。ここで一つの問題は最後の「元帳転記の例解」はなぜか訳出されなかった——これは当時の台本の使用事情がなにかあったのだろうか。「増訂第二版」で訳出されることとなるが。

『増訂 第二版』が昭和42年〔1967〕6月に出版される。第3部ルカ・パチャォーリ「簿記論」批判、第4部 余論(I) イタリアにおける複式簿記の成立、余論(II) 中世における工業簿記の先駆——工業会計発達史の一齣——、がつけ加わる。

「増訂第二版序言」。初版において、簿記論の末尾にある元帳転記の例解は訳出は省略されていた。パチャォーリはこの部分にはなんの解説をほどこさずにただ例示しているもので難解の部分とされているが、平井博士、江村教授は訳出をしているし、また英訳の二著、ドイツ語訳著でも訳がついているものである。ここを片岡教授はなぜに訳出しなかったか。

この改訂版は、後にふれるブラウン、ジョンストンの“Paciolo on Accounting”が1963〔昭和38〕年に出版されて後に出るが、この訳文を基礎に例解を片岡教授は邦訳する。この部分について「ピエトロ・クリヴィリによれば、仲介者もしくは簿記係が銀行業者となった場合、すなわち預金者の指図によって現金を授受する場合(いわゆる一種の Girogeschäft [振替取引—茂木])を仮定したものである」と(序言2ページ)と。

この部分の訳出の歴史はパチャォーリ研究史というよりは会計史学史をみるおもいがする。この元帳記入は叙述体形式でなされているが、訳出において現金を「与ふべし」とか、「持つべし」という表現が適当か、それとも「借

方」,「貸方」とするのがよいか——この時期には簿記技術的に、表現形式が完成しているかどうか。訳者それぞれの表現をしているところであった。片岡教授はようやく、ブラウン・ジョンストンによって訳出を決意されたいわくを持つ。

これを入れることによって、片岡教授はパチャォーリ研究を完成に一歩近づけられた。そして教授は「私はできるだけ近い将来において本書を全面的に書き改め、ウルフの『古代中世会計史』と連結させ、渾然たる『会計史』の体系に仕上げたいと、念願している」(序言・3ページ)とされる。ウルフの『会計史』を完訳しておられるが、これは念願で終っているが、御子息 片岡泰彦教授は御父君の仕事を継承してこの目的に向って歩む。

#### c. 西川孝治郎編『複製・パチャォーリ簿記論』(森山書店・昭和34〔1959〕年)

日本会計史、とくに明治期の洋式簿記導入史の研究に詳しい西川孝治郎氏(この書物の出版時には三菱石油株式会社の取締役であった)は、Littleton and Yamey (ed.)の『会計史研究』(1956)においてわが国における幕末・明治初期の複式簿記史を展開しているが、日本における簿記教育についても造詣が深い。一橋大学の歴史にかかわるがW. C. ホイトニー教授(1825~1882)についても研究していて、孫のホイトニー氏から大英博物館所蔵の『ズンマ』のうちの、簿記についてのマイクロフィルムをおくられた由。当時、平井教授は原典を所有されていたが未公開であり、ゲイスピークによるリプロダクションが原典の簿記論のおもかげをつたえる唯一のものであった。これとて稀覯本である。西川氏はそこで、「私はこれをなるべく有意義に利用したいと思い、同館の了解を得て複製し、足らない箇所を J. B. Geijsbeek の Ancient double entry bookkeeping から補って、

この小冊子を作ることとした」(まえがき)。西川氏の「まえがき」ではこのズンマには著者名としてパチャョーリという名はどこにも書いてないというが、Frater Lucas de Burgo Sancti Sepulcri とは記されているとする。

199丁左ページ(西川氏は198丁裏という)にさし絵がある(これは絵文字である)が、この絵はズンマ全体で、5枚ある。この絵についても、この人物はパチャョーリ自身ではないかという説もある。198丁から211丁までに及ぶものが「簿記論」部分である。この複製をなし、さらに曾田愛三郎氏の『学課起源略説』(明治21年)が4ページ取められている。この本には簿記史が語られ簿記のことを「記簿法」と記されている。

複製本は西川孝治郎氏の自費出版である。表紙にはパチャョーリの肖像がのり、さらに巻頭に有名な“A Demonstration in Mathematics”と題する白黒写真のパチャョーリ像が収められている。ここにパチャョーリ「簿記論」が、ゲイスビーグについて、複製として公刊された。どの程度の冊数が発行されたかは知らないが、原典のふん困気を伝え、また研究にも用いられる書物が出現した。パチャョーリ研究に大きな功献をすることとなる。筆者(茂木)は西川先生より寄贈をうけたが、それは昭和34(1959)年10月25日という日付がこの書にかき込まれている。ここに平井教授の独占がくずれることとなった。いよいよパチャョーリが身近になる。西川氏は原典のおもかげを伝えたいと努力され、公刊に先立って昭和34年5月の日本会計研究学会第18回大会(関西大学千里山学舎において)で、パチャョーリ簿記論に関する報告をされた。『簿記論』第1ページがスクリーンに出た時、各所から感激のため息が起こったのを私は感銘深くきいた」といわれ、「当時は原典の面影をしのぶことも容易ではなかったのである」(後出論文5ページ)といわれる。

西川教授は昭和43(1968)年2月に「パチャョーリ簿記論について」という論文を前出の『商学集誌』(日大)第38巻第1号に発表している。これは西川教授の会計史研究の総括ともいえる論文で注目すべきものである。

「実に日本簿記発達史の研究は、西洋簿記発達史の研究から始めなければならない」(はじめに)という主張をする西川教授は、この論文の構成を、「はじめに」について、つぎのようにする。

「実に日本簿記発達史の研究は、西洋簿記発達史の研究から始めなければならない」(はじめに)という主張をする西川教授は、この論文の構成を、「はじめに」について、つぎのようにする。

2 西洋簿記伝来とスペイン、ポルトガル、  
3 西洋簿記伝来とオランダ——この項目は注目すべきで、「17世紀の初めオランダおよびイギリス両東印度会社が九州の平戸に商館を設けて、そこで日本との取引を記録計算したのは、複式簿記がわが国土で本格的に実施された初めである」(集誌・1ページ)、これは導入史についてまことに重要な見解である——。4 西洋簿記書の輸入。5 フリッセンゲンの簿記について——オランダ会計史への注目(茂木注)——。6 私のパチャョーリ研究——西川教授はパチャョーリを学ぶ意義を、江戸時代の帳合の法がはたして複式簿記であるかどうかを判定する基準をパチャョーリに求めるのでといわれるが、西川教授はここに複式簿記が確立、存在しているとする(茂木注)。  
7 元帳記入例の一般解釈——これはパチャョーリ簿記書の末尾の例解であるが、パチャョーリ自身は説明を加えずにただのせている。これをめぐって様々の議論があるが、片岡義雄教授はその初版では、みずから未完成といわれつつ、訳出しなかったところである。この意味を説きつつ、8 元帳記入例に対する私(西川教授)の解釈——これは注目の研究で、西川会計史学が展開する(茂木注)。この記入例については別稿を予定している。西川教授のかかげる最後は、9 日本におけるパチャョーリ研究の歴史。ここは西川教授の独壇場で、明治10年代初期を克明に研究される。明治開国間もない頃に、すでにパチャョーリは注目されてきたことを示しているが、日本の洋式簿

記としての複式簿記実践はどのような展開を示したか。この論文は昭和40年代初期に出た注目のパチョーリ研究である。

#### d. パチョーリ『簿記書』の公開

昭和30年代において、わが国においてはパチョーリのズンマは、平井泰太郎博士が、その初版と第2版を唯一所有されていた。これは門外不出と久しくいわれていた。片岡教授はパチョーリを翻訳するが、この原典は参考にすることができなかつたようである。パチョーリ研究者にとっては幻の書であった。

昭和36〔1961〕年5月25日より27日まで神戸大学六甲台学舎において日本会計研究学会第20回大会が開催された。学会第1日、第2日に西川孝治郎氏(三菱石油株式会社取締役)によって「第2回造幣寮簿記方ブラガ資料展」が催された。ポルトガル人 Vicente E. Braga は明治初期に、造幣寮創設にあたって招かれ、その簿記組織を立案して、これを日本人に教えたが、大蔵省に移った後、官庁簿記の整備とその指導に尽した。このブラガの遺族に伝わっている資料と大阪造幣局所蔵の帳簿の展示であるが、当時の簿記組織がいかなるものであるか、またブラガがそれをどの様にわが国に伝えたかを明らかにする貴重な展示であった。

この展示とともに平井泰太郎博士(神戸大学名誉教授)による「パチョーリ展」が催された。本邦初公開である。この時、展示されたものは、ルカ・パチョーリの簿記書の初版(1494年版)と再版(1523年版)、さらにギッチ(Vincenzo Gitti)のパチョーリ近代イタリア語訳(1878年=明治11年版)、ワルテンベルク(E. G. Waldenberg)のパチョーリのロシア語訳(1893年=明治26年版)、そして世界最初の仕訳帳の例示をもつ簿記書、仕訳例による複式簿記法の解説書であるタリエンテ(Iovanni Antonio Tagliente)の1520

年版と、1646年の例解簿記法といった極めて貴重な書物であった。

これを筆者〔茂木〕は明治大学『経営論集』(第21集・昭和36〔1961〕年10月)に「日本会計研究学会第20回大会報告」として一文を草した。引用する。

「平井教授の説明によれば、全世界において原典の所在が現在〔昭和36年当時——茂木〕わかっているものは11冊だそうである。その1冊を平井氏が持っておられるわけである。また初版と再版をとともにもっているものは全世界に平井氏ただ一人だそうである。しかしこの本は長いこと平井氏の門外不出の書であって、わが国のパチョーリ研究者また会計史家には高嶺の花であり閲覧の機会にめぐまれなかつたものである。それが公開された。会計史研究者にとってはおそらく永遠の恋人にめぐりあつた感激をおぼえたこととおもう。展示会場がなにか興奮の渦にまかれていたようにおもえるのは筆者の思いすごしではなからう。教授の御出品を機に会計学会も世代が改まりつつあるという感を深くした」(明大『経営論集』105ページ)。

平井博士が展示、公開を決意させたものはなんだつたであろうか。神戸大学での御定年、さらに西川氏の複製版の出版なども関係があつたか。

さらには日本会計研究学会第40回大会が、昭和56〔1981〕年5月に再び神戸大学六甲台学舎で開催され、またパチョーリ簿記書の展示がなされた。その折にイタリア会計史研究の權威、泉谷勝美教授(大阪経済大学)のイタリア留学の成果である『複式簿記生成史論』(森山書店)が、日本会計研究学会太田賞の栄にかがやいた。

e. R.G. Brown & K. S. Johnston, *Paciolo on Accounting*, McGraw-Hill Book Company, 1963 の出版

これは米書であるが、新しいパチョーリ研究の開始ともなり、さらにわが国における研究の転機となったものである。これはゲイスビーク、クリブリにつぐ世界第三番目の英語訳書である。

これは三部よりなる。Ⅰ.パチョーロ、その人となりと業績。Ⅱ 簿記論の英訳——これが第三の英訳である。パチョーリ簿記論は従来、全体で36章といわれていたが、第36章を二つに別けて、第37章を設けている。Ⅲパチョーリ原典の複製——「スンマ」再版の内扉の写真（ブラウン・ジョンストンのp. 115）とそれに続いて初版の198丁左ページ（p. 116）から始まって、211丁左ページ（p. 142）に及ぶ複製。この第三部が中心となるのである。

パチョーリの肖像画(The Painting of Paciolo)が白黒写真で、その解説が、まず収録されており、巻末にパチョーリ研究の文献目録がついているが、英語の著書、論文のみが記されている。

第3部のはじめに、「複製についての注解」がついているが、第2版についても言及し、「パチョーリの『スンマ』、とくに第2版はその時代（16世紀初頭——茂木）の印刷技術のもっとも美しい例の一つとおもわれる」（p. 113）という。初版と第2版では30年のインターバルがあるが、この間の印刷術の発展はめざましいものがある。筆者（茂木）は昭和47〔1972〕年の英国留学で英国勅許会計士協会の図書館入口に第2版の展示があるのを見たが、その美しさに圧倒された。今日の印刷と殆んど変わらないと思った。書誌学的にも貴重な本である。

このコメントに興味深いことが書いてある。1494年の初版は99冊、1523年の第2版は36冊の存在が知られている。平井教授は11冊ということをつたったが、まことに興味があることである。現在のわが国に初版は7部ある。

この書によってまた、パチョーリの「簿記

論」の複製をみることができ、まことに身近な書物となった。この書は、後にみる本田耕一氏の研究の底本となったものである。

#### f. 小島男佐夫教授のパチョーリ研究と原典の複製

ブラウン・ジョンストンの『パチョーリ簿記論』が前提となったのであろうか、小島教授は『簿記史』（森山書店・昭和48〔1973〕年）をあらわす。日本簿記史、簿記学史にふれて平戸のオランダ商館、福沢諭吉の『帳合之法』、海野力太郎の『簿記学起源考』、東夷五郎氏の簿記史研究にもふれるが、その巻頭をかざる二つの章がパチョーリ研究である。

第一章 世界最初の簿記書——パチョーリ簿記論をめぐる——。まずパチョーリの人となりを説くが、その簿記書は彼のオリジナルかどうかの議論は興味深い。かつて江村稔教授も問題としたところである。「『ズムマ』の構成」の箇所は会計史研究のたのしみを教えられるものである。平井博士が若き日、『ズムマ』を手に入れられた経緯は興味深い。平井博士は学生時代にパチョーリ研究＝翻訳を手がけたことが、この『ズムマ』を発掘することとなったことを教えられる。小島教授の第一章の、「その資料のほとんどは、神戸大学名誉教授故平井泰太郎博士が、青年時代に蒐集されていたもので、愛子未亡人の御好意で利用させて戴いた」（序・3ページ）という。歴史研究はまず史料の蒐集であることを教えられるが、これについて史料批判を通じて、歴史の読みが必要となる。歴史を読む。これが歴史論である。

第2章 ブラウン、ジョンストン共訳「パチョーロ簿記論」——世界第三の英訳書——。これはゲイスビーク、クリヴェリィに続く第3の英語訳である。前二著との比較をしながら、原典の味わいを現代英語に表現しようとした。この書それ自体については前にふれ

ているが、小島教授のコメントとして本章がある。小島教授は本書の評価を「中世伊太利語で書かれた、非常に難解な、またきわめて入手し難い古典書を、一般の研究者が容易に接しうるように、近代英語で再現しようとした訳者両名の不撓不屈の努力は、いくら高く評価しても評価しすぎることはないであろう」(81ページ)とする。

パチョーリ簿記論の研究は翻訳、それによる研究の歴史であった。小島教授は翻訳に当たって、心すべき点をあげている。ブラウン・ジョンストンは「原本の旧式な語学から脱却して、パチョーリの論文を現代英語に改作せねばならなかった」(56ページ)が、「彼等は、この原本の『薫り』を保ち伝え、なおかつ読み易くするように努力してきたと記している」というが、これが充分に達せられたかどうかとしている。小島教授は英語に堪能であって、翻訳のあり方に一家言があった。外国書の翻訳は原著の意味を正確に把えて自国語で表現することであるとされるが、その際原文にただよう「薫り」、「味わい」を尊重すべきであるとする。ただ「行間に滲み出る原著の『味わい』に重点をおき過ぎると、原文の意味があいまいになり易く、その正確性を失い勝ちとなる」(57ページ)といわれ、この矛盾の克服に翻訳の苦労があるという。このようななかで、小島教授のパチョーリ解釈にもとづいて、「訳者たちの非常な努力と留意にもかかわらず、冗長・無益と思われる部分を削除し、現代語に訳しすぎたために、原文の薫り、味わい、特に原著者の心慮が十分に伝えられていない憾みが、多分に感じとられることは残念である」(57ページ)と批判される。

パチョーリ研究は翻訳が主流であるが、原文を正しく理解するために、その時代的背景の分析が必要である。このためにパチョーリの人と学問をとりあげる。この人となりのためのブラウン、ジョンストンの研究を紹介す

る小島教授はさらに教授の集めた史料によって、同時代にせまる。パチョーリについて複式簿記の発明者かどうかという議論に対する答えとして、両氏の議論を引用する。パチョーリが、「理論は重要であるが、もしそれが実際に用いられないならば無用であると考え」(小島・63ページ)る学問観に、それは本質をつく評価としている。ブラウン・ジョンストンは、そこでパチョーリを、「新定理の展開者、解説者としてよりは、むしろ、主として編集者であり、翻訳者であった」とする点を高く評価している。14・5世紀のヴェニスに複式簿記実践の集大成としての「ズンマ」。この実践性、その役立ちが当時の学問用語であるラテン語よりも、イタリア語による著述となった。

パチョーリ簿記書は、最初の複式簿記の著作というよりは、「彼は、印刷本として簿記書を出版した点では最初の著者であった」(64ページ)をする点での評価を小島教授は下す。

小島教授は La Scuola という1504年にパチョーリの簿記論部分の再版にふれるが、これは商業算術の本であって、その附録に簿記論が収録された書といわれるものである。幻の書で、かつてイタリア留学をした泉谷勝美教授もヴェニスの図書館で調査したようであるが見当らなかったという(小島・31ページ)。

小島教授の第1章、2章はまことに史料をたんねんに当たった研究で、歴史研究の興味をそそるものであるが、このようにして歴史的背景の分析までも射程に入れて翻訳すべきことを教えるもので、古典の訳出について、「ただ単に訳者達の語学力のみでなく、それよりもまして、彼らの持つ歴史的研究の深淺の程度如何に深く根差すものであることを、終りにのぞんで、しみじみと反省せざるをえない」(81ページ)としてむすぶ。

以上のような研究が続けられる一方で、小島教授はパチョーリ原典の複製を行う。これ

はコロンビア大学所蔵の原典を原寸大に複製をしたもので、原典の薫りを生き生きと伝えるもので、まことに容易に原典に接することができるようになった。

この複製の意義は大きい。Summa といえ、簿記論のみに注目するが、そもそもは数学書である。この数学が大部分であった。これは殆んど問題にされていない——この部分に接することができるようになった。昭和48〔1973〕年7月に京都の大学堂より限定150部、定価は25,000円であった。全世界で99冊といわれているが、ここに150部が加わることになる。この150部は国内外でどのようにして売られ、所蔵されていったか。日本国内にも相当部数が所蔵されていよう。日本はまことにパチョーリ大国となった。

定価は25,000円であるが、この年の秋、昭和48〔1973〕年10月に第1次オイル・ショック、狂乱物価の時代がきた。よい時期に出版できた。ちなみに小島教授はB. S. ヤーメイ教授とともに『複製・イエンピン簿記書』を昭和50〔1975〕年10月に同じく大学堂より限定200部を出版。この書まことに分量が少ないものであるが、定価は¥23,000であった。筆者は割引きで¥17,000でもとめる便宜をうけたが、本の価格の急上昇は恐しいものがあった。このイエンピン簿記書について、筆者は「イムピン簿記書〔英語版の研究——B. S. ヤーメイ・小島男佐夫教授による複製版共編著を通じて——』『立教経済学研究』(第28巻第1号〔1976(昭和51)年2月])にその紹介・書評をなしている。このようななかでパチョーリ簿記書は極めて身近になった。

#### (六) 昭和末期〔昭和50～60年代〕の研究——研究の担い手の交替——

パチョーリ原典が身近になるなかで、泉谷勝美教授は昭和47年度にイタリア留学をなす。この頃からそのほか若手研究者の多くが、イタリア、とくにパチョーリの生誕地に史料

を集める旅行をする。イタリア語を学び、身につけて、中世イタリア語の書であるパチョーリ原典に直接にあたるようになった。パチョーリ研究の世代が改まることを知る。50年代は「スンマ」にかえれの時代であったと泉谷教授はいう。

#### a. 本田耕一訳『パチョーリ簿記論』 (昭和50〔1975〕年6月・現代書館)

「本田氏の新著はイタリア語原典からの直接訳で、その点では日本の初めての試みである」と西川孝治郎博士は「本田耕一氏訳『パチョーリ簿記論』について」というタイプ印刷のパンフレット(1ページ)に云う。

筆者〔茂木〕は昭和50年7月5日に訳者・本田耕一氏より寄贈をうけた。7月1日付の西川孝治郎博士のお手紙もいただいた。本田氏の指導教授として、温和さときびしさがにじみ出た書簡である。

本書ははじめに、パチョーリ原文の複製がのっている。これは第二版(西川教授蔵書)の複製であって、本文でもある第二版からの訳出は世界最初のもの。続いて第一部「パチョーリ簿記論」であるが、これは翻訳で、「イタリア語原書からの直訳」と附記されている。第2部は「パチョーリについて」で、「ブラウンとジョンストン両博士の文の翻訳」と附記されている。第3部は「簿記論を訳して」という題をもって、15世紀のベニスの複式簿記事情、さらにイタリア語についてのべている。翻訳の苦労話しでもあるが、「簿記論翻訳の諸問題」としてまとめる。

「わたし(本田氏——茂木注)は文学書でもないのに、このように1冊の原書から、訳書が多く作られる事が不思議だった」(212ページ)という。本田氏がいうには「詳しく調べてみたら、それぞれ、訳文にかなりの違いがあり、これが新しい訳書が生れる理由の一つであることがわかった」(212ページ)と。

中世イタリア語の訳の困難さ、それぞれ訳者の語学の問題がここにある。「私はもっとも正しい訳文を知るために、パチョリの原文に当たった」とされ「原文から離れないように、ぎこちない日本語になっても、なるべく直訳の表現を採った」由。

いまここに本田耕一訳書を手にして、ズンマそのものの時代が来たという感が深い。まさに第一次資料にもとづく訳出の時代が来た。西川博士は「パチョーリ簿記論の(英・独語本からの)重訳時代が去ったとすれば、本田氏の訳書は、正に生れるべくして生まれたと言わなければならない」と評されて、「この書が現れなければ、当然にこれに代わるべき別の訳書が現れたに相違ない」と時代の流れを見すえておられる。そしてここにわが国第三のパチョーリ簿記論全訳書が世に出た。これは原典からの直接的訳出という意義をもつ。しかし、学界は冷厳である。本田氏の意欲的作業ゆえに批判も多い。これはイタリア史研究者の間から、また書誌学的観点からのものであった。氏の訳註は大いなる労作で、片岡義雄博士の業績をおもわせるが、この点での語学的批判があったと聞く。

ブラウン、ジョンストン両博士のパチョーリ研究が本田氏の研究の基底にある。これによって研究に入った本田氏は、さらにイタリア語を独習して、直接に原典にアタックした。これは西川博士所蔵の第2版があったからであろう。いよいよ原典時代が開かれた。その第一歩という先駆的役割りの意義は大きい。

本訳書の構成は3部よりなっている。

第1部は「パチョリ簿記論」で「イタリア語原書からの直訳」となっている。そこには、Ⅰ. パチョリ簿記論の表題、Ⅱ. ズンマの主第要3部の概要、Ⅲ. 帳簿目録、Ⅳ. 本文、Ⅴ. 元帳実例の5つの章がある。

第2部は「パチョリについて(ブラウンとジョンストン両博士の文の翻訳)」であり、Ⅰ. パチョリの肖像画、Ⅱ. パチョリの人と

業績からなる。

第3部は「簿記論を訳して」であり、本田氏の学問観があらわれる。Ⅰ. 簿記論翻訳の諸問題 Ⅱ. 簿記論の特色、Ⅲ. 複式簿記とヴェニス方式、そしてⅣ. 「ズンマ」とパチョリからなる。恩師西川教授は「参考文献は多いと思うが、それにはほとんど触れていない。かくては、この書自身が学界と無縁の書になりかねないと思う」と親心を示されている。しかし、とにかくパチョーリ簿記論で一書をつくりあげた本田氏の努力には敬意を表し、さらにアカデミックトレーニングを。

- b. 鈴木弥洲平, 中西旭, 杉浦強, 谷口不二男共訳著『ルカ・パチョリの生涯』(昭和52 [1977] 年, 日本ミログ票簿)

これは D. Ivano Ricci, Fra Luca Pacioli —l'uomo e lo scienziato, 1940を谷口不二男神父が邦訳したものが中心である。「人と学問」であるが、人となり为主である。このような本が出たが、わが国でのパチョリ人気はすごい。経済学におけるアダム・スミス、カール・マルクスにも比肩されるか、それ以上のものが、会計学の世界にはある。パチョーリは幸せな人である。

- c. 岸悦三著『会計前史——パチョーリ簿記論の解明——』(同文館, 昭和58 [1973] 年7月)

本書は2部に大別されるが、第1部は「パチョーリ簿記論の解明——所有主会計の簿記論——」であり、第2部は「代理人会計の展開——会計進展のモメント——」からなっている。ここでは第1部が問題となる。

第1部が、本論文とのかかわりで直接的に問題となるが、四個の章よりなる。本田耕一訳に続く訳として第4章「資料『パチョーリ簿記論』」が中心となる。第2章は「パチョー



り簿記論の概要」, 第3章は「パチョーリ簿記論の特質」で, 14・5世紀の経済的, 経営的事情からパチョーリ簿記論の特色を理解されようとしている。筆者(茂木)は前期的資本の簿記として複式簿記は形成されたと考えるが, 当時は必ずしも年次計算は行なわれていなかった。これを口別損益計算というが期間計算の形成前期の簿記法を体系化したものとしてパチョーリ簿記論を意義づけている。

第4章はパチョーリ簿記論の翻訳である。「本資料は, 中世イタリア語パチョーリ簿記論の原典よりの岸による直接の全訳である」(123ページの註)といわれるが, 本田耕一氏と同様に原典そのものからの訳であることを強調する。ここに第二の直接訳が出た。

「第1部では『簿記の父』パチョーリの論を直接, 原典に即して考察, 吟味してその全貌を明らかにせんとした」(序 i ページ)。岸教授は複式簿記の発達史を〈代理人簿記より所有主(資本主)簿記〉へという筋道で考えられているが, 資本主簿記における資本主勘定〔主人勘定〕が形成の指標となった。資本主簿記の展開としてパチョーリ簿記論をみる。代理人簿記としての複式簿記の完成を考えることはできるか, できないか問題となるが, 岸教授は資本主(所有主)簿記としての完成を考えている。A. C. リトルトン以来の伝統。「会計の中核をなすものは, いうまでもなく複式簿記である。その論の原典, パチョーリを原典で読むということは, 会計の道に志した著者の永い間の夢であった」という。ここに岸教授の夢がかなえられたが, 原典は何を使ったのであろうか。「われわれの眼前に厳然と聳え立つ, 中世イタリア語で書かれたこの不滅の古典に挑むというこの夢が, 今, やっと叶えられ」(序 ii ページ)たというが, 大いなる努力を必要としたであろう。ここに原典第二の翻訳が示されるが, これが収められる書物が『会計前史』という名をもっており, 翻訳書であるとは必しも見られて

いない。パチョーリ簿記論そのものの分量は必ずしも多くはないからであろう。原典の直訳である故か, 翻訳参考文献は示していない。

d. 片岡泰彦著『イタリア簿記史論』  
(森山書店・1988〔昭和63〕年4月)

「本書は, 世界最古の複式簿記文献の著者ルカ・パチョーリの簿記論を中心とするヴェネツィア式簿記の生成, 成立, 発展の過程を, 明らかにすることを目的としている」(著者のことば1ページ)とされ, 第1部 実践簿記の生成, 第2部 パチョーリ簿記論——理論簿記の成立, 第3部 簿記文献への発展——理論簿記の例証からなる。

「第2部では, パチョーリの簿記理論を取扱う。パチョーリは, 実践上の簿記を, 文章により理論化し, それを初めて出版したことにより, その意義が認められている」とされパチョーリ原典からの日本語訳を掲げる(第7章)。「本書では, パチョーリ簿記論の原典を基礎とし, カイル, ジッティ, イェーゲル, ゲイスベーク, ベンドルフ他多くの権威ある翻訳書(日本語訳を含む)を十分に参照しながら, 原典からの翻訳を試みたものである」(173ページ)とされる。日本語訳の歴史については, すでにみてきたところであるが, 片岡泰彦教授は「我が国では, 平井泰太郎教授, 黒沢清教授(1部のみ), 片岡義雄教授そして岸悦三教授の日本語訳がある」とされるが, 本田耕一氏の訳書にはふれていない。パチョーリ簿記論の全訳として, 日本語第5番目のもの, 原典直訳の3番目のものであった。

第6章の「パチョーリ簿記論の要約」は要領よくまとめられている。パチョーリは簿記書でよく教訓をたれている。商人の心得をとくとき, 格言を引用している。「何事もしない者は誤ちをしない, しかし何の誤ちをもしない者は学ぶことがない」(第18章のなかにある)。そして第5章は「整理」と要約されるような

帳簿記入の体系的整理をとく。パチャオーリ簿記論には日記帳そして仕訳帳・元帳への記帳例題、このような模擬例題を後世になって用いることが多いが、ここにはない。第12章では仕訳記入の例解をかかげているのみであった。これは簿記書全体に多くみられ、仕訳の方法の説明にしている。

商品勘定は荷口別商品名商品勘定によっている。いわゆる口別損益計算の段階であるが、期間の締切りも若干意識されている。片岡教授には口別計算下の損益勘定の持つ意義を積極的に説明していただけたらと思う。仕訳例において、「商品」勘定としての説明は総括的商品勘定を連想させてしまう。この関連がパチャオーリ簿記書の特色となっている。

第36章の末尾の元帳記入上の模範例の訳出と説明は見事である。御父君義雄博士は初版においては訳出しないままであった。この巻末の模範例について平井泰太郎教授の註解を泰彦教授が引用している。すなわち「此節は、パチャオーリ全巻中、最も質疑多き一節なりとす。多々説明を要すべく、研究を重ぬべき点の一なりとす。然れども茲には敢て註解をなさず、執筆の機あらんことを望みつつ……」と。この点の訳出表現のうちに会計史の研究史を知る。これは平井教授、江村教授、片岡義雄教授、本田耕一氏、岸教授、そして片岡泰彦教授のそれぞれの訳出を比較することは興味深いし、これがまたパチャオーリ簿記論の翻訳史であることを知る。ここに片岡泰彦教授の業績が出たが、親子二代にわたるパチャオーリ研究、イタリア簿記史の研究に敬意を表するものである。雄松堂の複製にも関係する。

## む す び

以上、ここに五個の翻訳書を、さらに西川孝治郎博士、小島男佐夫博士の複製書を見てきた。会計史学はものすごく発達している。会計史研究者は誰でもなんでもかんでもイタリア簿記史、そしてルカ・パチャオーリ研究は

できるという時代ではなくなった。大きくは会計史研究であるが、イギリス東インド会社会計史を専攻する私(茂木)は、イタリア簿記史については素人となってしまっている。専門化が進んだことである。そして、会計史研究を経済史家も、経営史家も注目している。これらの研究者の批判にたえる会計史研究でなければならなくなってきている。とくに昭和40年代後半からこの傾向は強くなっている。このことは経済史の世界において会計史学を無視することはできないことでもあって、逆に歴史論的訓練が大いに必要とされてきていることである。会計史は会計学者の間のものだけではなくなっている。

A. C. リトルトンは、その『会計発達史』のなかで、複式簿記の生成は同時に確立であったという。「パツィオロの『ヴェニスにおける方法』に関する叙述を読むことは、まさしく中世紀に対する現代20世紀の負い目をはっきり知る一助ともなるであろう」(片野訳・132ページ)ともいっている。また15世紀から19世紀、20世紀への社会の変化——資本主義の生成・発展——と比較して、「全般的にいえば、簿記は社会が変わったほどには変わっていない。というのは、簿記がのろまだというのではなく、かえって、簿記はその初期において早くもほぼ完成に近い域に達していたので、そこから現代の状態に達するのに大した距離がなかったのである」(片野訳・118ページ)ともいっている。このような状況を集大成したものとしてパチャオーリの簿記書があったという評価が、この簿記書を尊敬することとなるのであろうか。

中世イタリア簿記史研究の第一人者は泉谷勝美教授(大阪経済大学)である。しかし、まだ泉谷教授はパチャオーリについては何んの発言もしていない。1211年のフィレンツェの両替商帳簿の分析からこつこつと研究を進めてゆく態度に学者のあり方を教えられるが、一日も早い教授の見解を聞きたいものである。

教授はフィレンツェの史上最古の複式簿記史料から出発し、1340年のゼノアの財務官帳簿にいたる筋道を、かの『複式簿記生成史論』にまとめあげた。これからパチョーリにいたる後半を、イタリア留学で集めた史料によって実証的に体系化されようとしている。その完成を期待するが、15世紀初頭のヴェネツィア式簿記に注目して筆者（茂木）に教えてくれたことがある。その要点をまとめてみよう。ズンマは人はヴェネツィア式簿記法の集大成といわれるが、ヴェネツィア簿記実践そのものとは必ずしも一致していない。そこで、パチョーリは年次計算がまだ支配的でない時代に、どこに焦点をあてるか迷ったのではないかと。これは「ズンマ（簿記論）」の統一性、体系性の問題でもあるが、必ずしもまとまりがない。これは36章全体をみわたしてみれば一目瞭然であって、あちこちにある簿記実践を問題としすぎて、まとまりがなくなっている。私（茂木）はズンマは必ずしも入門教科書ではなく、実践的に複式簿記法を使っている簿記係の実務の指導書ではないかと考えている。15世紀初頭にはヴェニスにおいてはすでに複式簿記が実践されている。印刷されていない、手記きの稿本が存在、当時、各地にあった簿記学校の教材の存在を改めてみつめる必要もあろうかと考える。そのなかで、たまたまパチョーリのズンマが印刷されて、そのいくつかは今、このこっているのである。

この書物について、世界各地で、祖述的研究と、さらに翻訳が数多くなされてきている。近代訳としては Dr. E. L. Jäger, Lucas Paccioli und Simon Stevin ; nebst einigen jungern Schriftstellen über Buchhaltung, Stuttgart, 1876が最も古い。「ルカ・パチョーリとシモン・ステイビン、そしていくたりかのその後の簿記著者たち」というものであった。このパチョーリの簿記書部分がゲイスビークの英訳の基礎となったという。ここでさらに書名がパチョーリとともに17世紀の

ステイヒンが対応的にとりあげられていることである。このイエーゲルの着眼に注目したい。これは今日の観点を先取りしている。これが近代訳の元祖であって、全世界的に注目されてゆく。

わが国においては、イエーゲルからすれば、訳のうえでは孫に当る平井泰太郎教授が子に当るゲイスビークによって邦訳を大正後期になしとげた。その後の黒沢清教授も片岡義雄教授も英訳、ドイツ語訳によってズンマの邦訳を進めてきた。片岡義雄教授は英訳書二冊、独訳書一冊によって、原典の味にせまろうと邦訳された、まことに訳者として、学者としての良心を感じるものである。

いまここに、明治初期から、とくに大正期の平井教授の研究からみてきたが、(六)期にいたると研究は若手に移行したという感が深い。(五)期以前では江村 稔教授は御健在で活躍されているが、明治期の曾田、海野はもとより、平井博士をはじめ、黒沢、片岡、山下、片野、西川、小島の諸先生は数々の業績をのこして天国に旅立たれた。イタリア簿記史研究は、イタリア語に堪能な泉谷勝美教授ほかは、井上清教授、翻訳を行ったほんの数人の人達になってしまった。原典、原史料を問題とするかぎりイタリア語を身につけていなければどうにもならなくなってしまった。専門性と研究の高度化であるが、ここに世代の交替を見る。このようななかで、片岡泰彦訳を最後にもう翻訳はでないであろうか。

ズンマの訳は先行する訳に教えられつつ、それをのりこえようとして行われてきた。ズンマには簿記を学ぶ者にはるかなるあこがれをいだかせる。これが新訳となるのであるが、いまや復刻版が相当数出版されている。大正、昭和初期では不可能だったものが、西川孝治郎博士、小島男佐夫教授の御努力によって復刻されたことが大きい。さらに原典も相当数わが国にはある。パチョーリ研究の素材にはことかかなくなり、研究の蓄積もできている。

新研究、新訳を望みつつも研究の困難が大きくなった。研究の発展である。中世イタリア語の困難さがいろいろの解釈を生む。新訳の可能性は大きいし、期待もしている。

経済史家も注目している。イタリア経済史研究は着実に前進した、それは星野秀利氏、清水広一郎教授（広島大）の業績である。しかし、両教授はすでに逝去。イタリア史学界も交替期かとおもうが、それらは本田耕一氏訳を注目していた。また、書誌学的研究のなかで、邦訳がいろいろと再吟味されている。このようななかで、パチョーリそれ自体の研究はきわめられるところはきわめられてきた。今後の研究はパチョーリそれ自体を点として分析するのではなく、15世紀と17世紀との比較で今日のあり様をみさだめる方向が必要となる。これはスティヒンとの関連で、期間計算・決算の問題が改めて問われて、近代会計成立史が体系化されることとなろう。この方向に今後のパチョーリ研究のあり方をみる。これは前述のイエーゲルの研究であり、また Dr. P.G.A. De Waal, Van Paciolo tot Stevin, een bijdrage tot de leer van het boekkouden in de Nederlanden, Roermond, 1927である。パチョーリにはじまってスティヒンにいたる——これが近代会計成立史であるが、この二点を比較史的にとりあげて、現代をみつめる方向である。イタリア簿記史の現代的意義をこのように地位づけている。ここで改めて Simon Stevin 研究を Pacioli 研究と同水準をもってゆく努力が望まれる。

最後にもう一点。Pacioli 研究はその簿記論研究として、会計学の分野で注目されている。この簿記論の収まった Summa は「算術、

幾何、比および比例全書」という名の数学書である。全体 308 フォリオのうちで、簿記論は僅かに13フォリオである。数学書のなかで、なぜ簿記論が扱われたか。ここで大きく「数学」といつているが、この数学は商人とか、商業とかにかかわる実用数学で、論理性を重視する数学ではなさそうである。数学の世界では、この書は、会計学・簿記学における程には問題とされていない。数学史の分野においてパチョーリの評価を知りたい。この簿記書〔簿記論〕の部分の評価もズンマ全体のなかでとらえなおす必要があるのではなかろうかと思う。ズンマ全体の評価という仕事はあまりなされていないように思うが、本当の評価はここから始まるわけで、パチョーリ研究者の方々の数学史家との協同研究をのぞみたくおもう。これはパチョーリのみでなく、シモン・スティヒンについても同じことが言える。しかし、スティヒン研究ではデ・ワール博士の仕事にもあるように『数学的伝統録』（1608）の全貌と、その書物におけるスティヒン簿記書の地位ではっきりとしている。このような研究をのぞみたい。学際的研究がのぞまれるが、パチョーリはまことに多角的な万能学者ということであろう。パチョーリは幸せな学者で500年後の日本で、いろいろととりあげられて……。1991〔平成3〕年11月2日の日本簿記学会第7回全国大会（早稲田大学において）で、筆者は「パチョーリ『簿記書』の周辺によせて」と題する記念講演をすることとしている。

〔附記〕なお、1990年に雄松堂書店からも初版の複製がなされていることをつけ加える。170部とのこと。